

## 刹那滅と輪廻轉生 “ādhyātmikakṣaṇikatva”

——*Mahāyānasūtrālamkāra* 第 XVIII 章 第84～88偈の解説研究——

(承 前)\*

早 島 理

【本論】 Skt.152-6, Tib.P.257b5, Ch.647b.

以上の十四種の生起がある場合に、内なる有爲なるものは刹那滅であることを、原因 (hetu) に区別がある、認識 (māna, 量ること) に区別があるなどの [九種の] 根拠によって理解すべきである<sup>(1)</sup>。

【釈疏】 P.174b4, D.148a4.

「以上の十四種<sup>(2)</sup>の生起がある場合に [、内なる有爲なるものは刹那滅であることを、原因に区別がある、認識に区別があるなどの根拠によって理解すべきである。]」云々と云ううち、内なる有爲なるものの生起には十四種ある。[その]十四種すべての生起が刹那滅である。如何なる理由で刹那滅であるのかといえ、[答えよう]。〈1〉原因の区別、〈2〉認識の区別云々と云う、原因 (gtan tshigs) と認識 (tshad ma)<sup>(3)</sup>とにより刹那滅であると理解すべきである。

【広註】 P.171b6, D.153a4.

「原因に区別がある、認識に区別がある」と云うのは、原因の区別と認識の区別とである。認識の区別とは、カララなどの状態の [区別] である<sup>(4)</sup>。

〈1〉 hetu-viśeṣa — (1) ādyas utpādas

【本論】 Skt.152-8, Tib.P.257b5, Ch.647b.

先ず、(1)最初に生起する場合は、原因に区別があるからである。何となれば、もしこの [最初の生起] に原因としての区別がなければ、その後には有爲なるものが生じて来る場合に、[結果である有爲なるものの] 後後の区別は認められないであろう<sup>(5)</sup>。原因に区別が無いからである。しかし実際は [原因に] 区別があるから、それは [それより] 後のものと別である。したがって刹那滅が成立するのである。

【釈疏】 P.174b6, D.148a4.

「[先ず、] 最初に生起する場合は、原因に区別があるからである。」と云ううち、最初に母の胎内に生起する場合は、原因に区別があることに基づいて、刹那滅であると理解すべきである。すなわち、最初に識が母の胎内に生じるこのことを以て原因とし、それに引き続いてカララ<sup>(4)</sup>が生じる。カララを原因としてアルプダなど、以前のものとは異なる別なものが生じる。それゆえに刹那滅であると理解すべきである。

「[何となれば] もしこれ (最初の生起) に原因としての区別がなければ、その後には有

爲なるものが生じて来る場合に、[結果である有爲なるものの]後後の区別は認められないであろう。」と云ううち、もし、母の胎内に生じたその最初の刹那は (P.175a) 何か常住単一のものであり、前の刹那が滅して後に別なものが生じるのは、原因は単一であり区別がない [のであると云う] ならば、後に、[胎内に生じた] カララとは別に、それとは異なるアルブダ (D.148b) として生じ、さらにアルブダとは別に、それとは異なるペーシー (1tar 1tar po ; peṣi) として [生じる] など、後々の時に以前とは異なる別々のあり方をしたものが生じることが見られる、と云うことはありえなくなる、と云う意味である。

何故に常住なるものから [以前とは] 異なる区別あるものが生じることはありえないのかと問うならば、[それ故に、]「原因に区別が無いからである。」と云う。常住単一のものには原因に区別は無い。原因は単一のまま消滅するから、単一の原因の消滅から衆多の結果が生じることはありえない。例えば大麦 [という単一] の種から、大麦や米などの種々の実が生じることはない如くである。

「しかし実際は [原因に] 区別があるから、それは [それより] 後のものと別である。したがって刹那滅が成立するのである。」と云ううち、もし、原因に区別があるとき、最初の原因が刹那Aとすると、そのAが滅した直後に前のとは異なる後々 [の原因] B・Cが生じてくる。原因に [以前とは] 異なる区別があるときは、結果においてもカララとは異なるアルブダなど別なものが生じてくる。かくの如くに変化がある時には、刹那滅が成立する。もし [原因が] 何か常住であるならば、常にまたカララのみとして現われてくるのであり、アルブダなどの [カララとは] 異なるものが別々に現われてくることはないであろう。

【広註】 P.171b7, D.153a5.

「もしこれに」と云うのは、最初の生起に、である。「原因として区別がなければ」と云うのは、原因の区別に基つき生起の区別あるものとはならないだろう、と云う意味である。まさにこの故に、「その後には有爲なるものが生じて来る場合に[結果である有爲なるものの] 後後の区別は認められないであろう。原因に区別が無いからである。しかし実際は [原因に] 区別があるから、それより後後のものよりそれは (P.172a) 別である。」と云うのは、[原因に] 区別 [があるから]、[アルブダなどの] 後々のものよりその [カララの] 生起は別である。したがって、刹那滅が成立するのである。

## 〈2〉 mānaviśeṣa — (2) taratamotpāda

【本論】 Skt.152-10, Tib.P.257b7, Ch.647b.

(2)順次に生起する場合は、認識に区別があるからである。認識 (māna) とは [認識された] サイズ (pramāṇa) と云う意味である。何となれば刹那ごとに他のもの [に変化すること] が無ければ、サイズ (parimāṇa) の区別は無いことになろう<sup>(6)</sup>。

【釈疏】 P.175a7, D.148b5.

「順次に生起する場合は、認識に区別があるからである。」と云ううち、カララなどからアルブダなどの生育したものへと生じるのはまた、認識に区別のあることを原因とし

て、刹那滅であると理解すべきである。何となれば、刹那滅であるから、カララの時の小さな身体が消滅してアルプダの如き生育した存在として生じてくるのである。

認識 (māna) と云う意味を示そうとして、(P.175b) 「認識 (māna) とは [認識された] サイズ (pramāṇa) と云う意味である。」と云ううち、認識 (māna, tshad) と云う意味は、順次に変化し増加する [、認識された] サイズ (bong, pramāṇa) をいう。

「何となれば、刹那ごとに他のもの [に変化すること] が無ければ、サイズ (parimāṇa) の区別は無いことになる。」と云ううち、もしものが何か常住であるならば、前の刹那が滅して後の刹那に、別なもの別なものが [次々と] 生じることはなくなる。[その場合には] カララの時に小さなサイズで存在し、(D.149a) 後にアルプダの時に大きなサイズに変化するなどなどの、以前と以後とでの、[認識された] 大小のサイズの区別がなくなるであろう。最初のカララの時のあり方が常住ならば、その [同じすがた] のみとして現われてくるのであり、アルプダなどなどの大きなサイズとして時に現われることもないであろう。[実際は] そうではなく、カララの時期が消滅して後にアルプダなどが生じてくるから、刹那滅であると理解すべきである。

【広註】 P.172a1, D.153a6.

「何となれば刹那ごとに他のもの [に変化していること] が無ければ、サイズの区別は無いことになる。」と云うのは、カララ、アルプダ、ガハナ (ghana)、プラシャーカー (praśākā) の状態として [の区別がなくなるであろうと云う意味] である。

### ＜3＞ cayāpārthya : ayoga — (3) upacaya-utpāda

【本論】 Skt.152-12, Tib.P.257b7, Ch.647b.

(3) 成育しつつ生起する場合は、成育が無意味になるからである<sup>(7)</sup>。何となれば、成育とは [五蘊の集積である身体を] 養成することである。刹那滅でなければこの [養成] は無意味になってしまうであろう。全く同じ状態が存続するからである。

さらにその同じ成育が不合理になるからである。何となれば、刹那ごとに次々と増加して生起することがなければ、成育は不合理になるであろう。

【釈疏】 P.175b4, D.149a2.

「成育しつつ生起する場合は、成育が無意味になるからである。」と云ううち、成育して生じている場合でも成育が無意味にならないことを原因として、内なる有爲なるものは刹那滅であると理解すべきである。

成育の意味を示そうとして、「何となれば、成育とは [五蘊の集積である身体を] 養成することである<sup>(8)</sup>。」と云う。以前には虚弱で痩せ衰えた姿であったのに、後には食べ物・睡眠などが……<sup>(9)</sup>、肥えて生長し丈夫になるなどを云うのである。かくの如く有爲なるものは刹那滅であるから、食物などにより生長し、以前の虚弱で痩せ衰えた姿が消滅して後に……<sup>(9)</sup> 肥えた姿に生じさせるから、成育が無意味にはならないのである。

「刹那滅でなければこの [養成] は無意味になってしまうであろう。全く同じ状態が存続するからである。」と云ううち、もし [身体などの] 存在しているものが、前の刹那に滅して後の刹那に生じる如く刹那滅からなりたっているのではなく、何か常住であるなら

ば、(P.176b) 常住で変化せず、常にまったく同じ状態で存続するであろう。このように、以前には痩せ衰え虚弱であったものを食物などにより生長させ、さらに痩せた状態であったものが肥えて丈夫になることがありえなければ、食物などにより……<sup>(10)</sup>また丈夫に生長させることはないから、食物などを摂取することも無意味となるであろう。しかし〔実際には〕そうではない。以前に虚弱で痩せていたのに、後に食物などを摂取して、後に……<sup>(9)</sup>丈夫になり肥えることなどは無意味ではない。それゆえ有爲なるものは刹那滅である。(D.149b)

〔有爲なるものが〕常住ならば、成育などの場合にも別な誤謬があることを示そうとして、「さらにその同じ成育が不合理になるからである。何となれば、刹那ごとに次々と増加して生起することがなければ、成育は不合理になるであろう。」と説く。もし刹那ごとに、ある存在から次の存在へと移り変化することがなければ、食物がまた身体を生長させるあり方をしていることは不合理になる。これは何故にと問えば、常住の場合には刹那ごとにまた〔直前の〕刹那とは異なるサイズ(bong, pramāṇa)に順次に変化したり、あるいは丈夫になり肥えるようになることがないから、食物を摂取しても〔身体を〕生長させる働きをなさないことになる。したがって、食物が〔身体を〕生長させるあり方をしていることは成立しないのである。

#### 〈4〉 āśritatva-asambhava — (4) āśrayabhāva

【本論】 Skt.152-14, Tib.P.258a1, Ch.647b.

(4)依処が存することにより生起する場合は、依存するものが不可能になるからである<sup>(11)</sup>。何となれば、依処が〔常住で〕ある場合に、その〔依処〕に依存するものが〔常住で〕ないことは理に合わないからである。例えば、乗物が停まっていて、それに乗る人が停まっていない（移動する）如くである。さもなければ〔すなわち、依処が常住で、それに依存するものが刹那滅であるならば〕、〔常住な〕依処それ自体がありえなくなるであろう<sup>(12)</sup>。

【釈疏】 P.176a6, D.149b3.

「(4)依処が存することにより生起する場合は、依存するものが不可能になるからである。」と云うち、依処が存することにより生起する場合、さらに、依処の存在とは眼根乃至意根までの六根である。この場合、依存するものとは眼識乃至意識の六識である。このうち諸識は刹那滅である。依存する諸識は常住ではないから、その依処である諸根が常住であることはまた (P.176b) ありえない。それ故に、諸根は刹那滅であると理解すべきである。

あるいは他の者が以下のように考えて反論するかも知れない。依処である根は常住であり、それに依存する諸識は無常であると。かくの如き〔主張〕はまた理に合わないことを示そうとして、「何となれば、依処が〔常住で〕ある場合に、その〔依処〕に依存するものが〔常住で〕ないことは理に合わないからである。」と説く。もし眼根などの諸根が刹那滅ではなく常住の相をしている時に、それに依拠して依存している諸識が「刹那滅にして無常」でないならば、〔それは〕理に適っている。したがって根が常住ならば識もまた常住となる。もし識が無常ならば根もまた無常となる。

その喩例を (D.150a) 示そうとして、「例えば、乗物が停まっていて、それに乗る人が停まっていない（移動する）如くである。」云々と説くのである。乗物とは馬などである。乗る人とはその「馬」に乗る者などである。もし乗物である馬が何処へも往かずに一ヶ所に停まっているならば、それに乗る人が他の所へ移動することは理に合わない。その人も「一ヶ所に」停まることになる。もし馬に乗る人が他の所に移動するならば、彼を運ぶ馬もまた必ずや他の所に移動することになる。あるいはまた、布が燃えると布に依存した青などの色彩もまた必ずや燃えてしまう。もし青の色彩が燃えない時に、布「だけ」が燃えるのは理に合わない「如くである」。

「さもなくば、すなわち、依処が常住で、それに依存するものが刹那滅であるならば、[常住な] 依処それ自体がありえなくなるであろう。」と云ううち、もし識は刹那滅で根が刹那滅でなく常住ならば、[常住な] 諸根が[無常な] 識の依処にして拠り所であるのは不合理である。

【広註】 P.172a2, D.153a7.

「何となれば、依処が[常住で] ある場合に、その[依処] に依存するものが[常住で] ないことは理に合わないからである。」と云うのは、[乗物が停まっていて、それに乗る人が] 停まっていない（移動する）[のはいえぬ] 如く、[眼根が停まっていて、] 眼識が移動するのはありえない<sup>(13)</sup>。(D.153b) 眼識が刹那滅であって、眼[根] が刹那滅でない[のはいえぬ] との意味である。

<5> ① ; ② sthita-asambhava — (5) vikāra ; (6) paripāka

【本論】 Skt.152-16, Tib.P.258a2, Ch.647b.

(5)変異により生起する場合に、また(6)成熟により生起する場合に、存続するものはありえなくなるからである<sup>(14)</sup>。

<5>① — (5) vikāra

[常住であって]最初から消滅しないものには変異が無いからである。何となれば、まったく同じ状態に留まっているものには、欲望などによる変異はありえないのである。

<5>② — (6) paripāka

さらに[常住であって最初から消滅しないものには] 別な状態に成熟することも無いのである。[何となれば]最初に消滅することが無い場合は最後に<sup>(15)</sup>変異は無いからである。

【釈疏】 P.176b7, D.150a4.

「(5)変異により生起する場合に、また(6)成熟により生起する場合に、存続する(P.177a)ものはありえなくなるからである。」と云ううち、貪・瞋などのために身体の色が別様に生じたり、幼児などの存在から青年などの姿をしたものに成熟して生じることもまた、刹那滅ではなく常住な実在のものには、かくの如き変化はありえないのである。

何故に[かくの如き変化は]ありえないのかを示そうとして、「[常住であって]最初から消滅しないものには変異が無いからである。」と説く。常住なるものには最初の自性が消滅して無くなることもないし、以前とは異なった別な相を受け取ることもない。単

一の自性として存続するものは、種々の姿に変化することがなく常住である。[その場合は] 貪欲などにより自分の身体や顔などが別様に变化することもありえないし、幼児から青年などに成熟することもまたありえないのである。

この同じ意味を詳細に示そうとして、「何となれば、まったく同じ状態に留まっているものには欲望などによる (D.150b) 変異はありえないのである (vikāra)。さらに「常住であって最初から消滅しないものには」別な状態に成熟することも無いのである (paripāka)。」と説く。常住の相をもって存続しているものには、貪欲の心が生じることにより、ある顔の色が以前とは別な笑顔などの相をした顔の色に後に変化することはない。あるいは幼児などから後に青年などの姿をしたものへと、身体が大きく成熟することはない。

何故にありえないかを示そうとして、「[何となれば] 最初に消滅することが無い場合は最後に<sup>(15a)</sup>変異は無いからである。」と説く。変異して生じる場合、また、貪欲の心が生じるのは「次の如くである」。「もし、」最初、「貪欲の」心が未だ生じていないものに、顔の色などの点で衰微も消滅もないならば、「最後に」貪欲の心が生じても、顔の色などが笑い顔などの (P.177b) 相へと別なものに変異して現われることもない「であろう」。「顔の色などは」貪欲が生じる時も、貪欲が生じない場合とまったく同様に現われる「はずである」から。

あるいは成熟の場合も同様であって、もしまた常住であって、幼児の姿が別なものになって「幼児の姿が」消滅することがありえないならば、青年の時に、さらに身体が大きさが大きくなるなど、別なものになることがないのである。「このように」あらゆる場合にまた、幼児の自性のままで止まって現われることになるであろう。「しかし実際には」そうではない。「変異の場合、」貪欲の心が生じる時には、以前の顔や色が消滅し、後にはそれとは異なる別な顔や色が生じるのである。成熟の場合にも、幼児などの時の身体の大きさなどが消滅して、後にそれとは異なる別な大きさの、青年の身体が生じるのである。それゆえ刹那滅が立証されるのである。

以上のように、最初から消滅がなければ「最後に」変異がありえないことを証因として、①変異及び②成熟の両者の生起は刹那滅であることが立証されたのである。

#### <5> ③ ; ④ hīna-viśiṣṭatva — (7) ; (8) hīna-viśiṣṭa

【本論】 Skt.152-19, Tib.P.258a4, Ch.647b.

【上記の】変異により生起する場合や成熟により生起する場合と同様に<sup>(16)</sup>、劣った【者】として及び優れた【者】として生起する場合にも、刹那滅であると理解すべきである。何となれば、諸々の有爲なるものがまったく同じ状態で存続している場合は、それに基づいて、もしくは悪趣にもしくは善趣に「転」生するであろう、業の習気(karma-vāsanā)<sup>(17)</sup>が働きを得ないことになってしまうからである。まことに順次に相続の転変する個別性(samātātipariṇāma-viśeṣa)に従って、「業の習気が」働きを得ることは理に適っているのである。

【釈疏】 P.177b5, D.150b7.

さらに、最初に消滅がなければ最後に変異はないというこの同じ証因により、優れた

「[者]と劣った[者]としての生起は刹那滅であることを立証しようとして、「[上記の、変異により生起する場合や成熟により生起する場合と]同様に、劣った[者]として(D. 151a)及び優れた[者]として生起する場合も、刹那滅であると理解すべきである」と説く。たとえば、変異による及び成熟による生起においては、最初に消滅がなければ[最後に]変異はありえないことを証因として刹那滅が立証された如く、劣った[者]として及び優れた[者]として生起する場合にもまた、最初に消滅がなければ[最後に]変異はありえないというその同じ証因により、刹那滅が立証されると理解すべきである。

この同じ証因により、如何様に刹那滅を立証するのかを示そうとして、「[上記の変異により生起する場合や]成熟により生起する場合と同様に<sup>(16a)</sup>、諸々の有爲なるものがまったく同じ状態で存続している場合は、[それに基づいてもしくは悪趣にもしくは善趣に[転]生するであろう、]業の習気が働きを得ないことになってしまうからである。」と説く。たとえば、(P.178a) 幼児から青年などへと成熟する場合に、先に幼児の時[のあり方]が消滅せず、青年の時においてもまた別なものへと変化しない場合は、常に幼児のみとして現われてくることになり、青年の姿をしたものなどとしては如何なる時も現われてこないであろう。同様に、有爲なるものが同じ状態に留まり、何か常住なものであるならば、以前には天・人などの世界で善行を積んで、後に[その積んだ]善行の業が消滅し、不善をなした業の習気により、後に三悪趣の苦の結果を感受することもないであろう。天・人などの世界においても[三悪趣の]苦の自性を備えているはずであり、以前の三悪趣の世界における苦の自性の状態から、善をなした業の習気により、以前の苦の感受を滅して後に楽を感受することもなく、常に苦とともにあることになるであろう。

「それに基づいて、もしくは悪趣にもしくは善趣に[転]生するであろう、[業の習気が働きを得ないことになってしまうからである。]まことに順次に相続の転変する個別性に従って、[業の習気が]働きを得る[ことは理に適っている]からである。」と云ううち、[実際は]そうではなくて、以前に三悪趣の世界にあった時に悪行をなした刹那が消滅して、後に善をなした相続の習気が成熟して来る個別性にしがいい、後には天・人の善趣においてその結果を感受することになるのである。あるいはまた、以前には天・人の世界にあり善行をなした業があったのに、以前になした善の業が消滅して、後に不善をなした業の習気が成熟して生長してくるから、最後には三悪趣にて苦の結果を感受することになるのである。無常の場合にはかくの如くなるのである。しかし何か常住な場合には、常に苦のみを感受することになるか、あるいは常に(P.178b) 楽のみを感受することになるはずで、時には楽を[感受し]時には苦を[感受する]如く、種々に[苦楽を感受]するようにはならないであろう。

<5> ⑤; ⑥ bhāsvāra-abhāsvāra — (9); (10) bhāsvāra-abhāsvāratva

【本論】 Skt.152-22, Tib.P.258a5, Ch.647b.

【上述と】まったく同様に、明澄さ[ある者]として、及び明澄さ無き[者]として生起する場合も、刹那滅が理に適っている。

<5> ⑤ bhāsvāra — (9) bhāsvāratva

先ず、明澄さ[ある者]として[生起する]場合は<sup>(18)</sup>、[刹那滅でなければ]まったく

同じ状態で存続しているものに、心 [のみ] に安らぐあり様はありえないからである<sup>(19)</sup>。

〈5〉 ⑥ abhāsvara — (10) abhāsvaratva

明澄さ無き [者] として [生起する] 場合<sup>(20)</sup>も、最初に消滅することなくして最後に変異することは不合理であるから。

【釈疏】 P.178b1, D.151b3.

最初に消滅がなければ最後に変異もないというこの証因によって、明澄さ [ある者] として及び明澄さ無き [者として生起する] 場合も刹那滅であることを立証しようとして、「明澄さ [ある者] として、及び明澄さ無き [者] として生起する場合 [も]、[上述と] まったく同様に、刹那滅が理に適っている。」と説く。もし、最初から消滅せず [最後にも] 変異しない [、すなわち常住な] のではなく、存在するものが刹那滅であるならば、以前に明澄さ [ある者] であったのから後に明澄さ無き [者] になる、あるいは<sup>(21)</sup> ……以前に明澄さ無き [者] であったのから後に明澄さ [ある者] になる……<sup>(21)</sup>のは理に適っている。

〈5〉 ⑤ bhāsvara

[しかし、存在するものが] 常住ならば、以前の明澄さ無き者から、後に明澄さの相ある者へ [変化するの] は理に合わない。[このことを] 示そうとして、「先ず、明澄さ [ある者] として [生起する] 場合は、[刹那滅でなければ] まったく同じ状態で存続しているものに、心 [のみ] に安らぐあり様はありえないからである。』<sup>(22)</sup>と云う。[最初から] 滅することなく [最後に至っても] 変異しない常住の相あるものとして存続しているものが、以前の明澄さ無き [者] から、後に明澄さの相あるものとして生じるのは理に合わない。[常住ならば] あるいは常に明澄さ無き [者] であり、あるいは常に明澄さ [ある者] である。[そうではなくて] 以前の明澄さ無き [者] から後に明澄さ [ある者] に変異する場合は刹那滅である。何故にと云えば[次のように答えよう]。化樂天などの天の領域にあるもの (Ihaḥi ris) が、明澄さ無き [者] から明澄さ [ある者] に生じるのは、心 [のみ] に安らぎ心を原因として生起するからである。したがって心は刹那滅であるから、それから生じた顔の色・身体などの結果である諸存在もまた刹那滅で (D. 152a) あると理解すべきである。

〈5〉 ⑥ abhāsvara

[最初に] 消滅することなく [最後に至っても] 変異しないものには、明澄さ [ある者] から明澄さ無き [者] に変異することのありえないことを示そうとして、「明澄さ無き [者] として [生起する] 場合 (P.179a) も、最初に消滅することなくして最後に変異することは不合理であるから。」と説く。最初に明澄さの自性ある者としての存続から、後に明澄さ無き自性の者へと変異することは、また[以下のように理解すべきである]。最初から消滅せず常住な存在においては、以前の明澄さ [ある者] から後の明澄さ無き [者] へと、かくの如き変異は理に合わない。したがって以前には明澄さ [ある者] として存続していたものが消滅し、後に明澄さ無き [者] として生じるのである。それゆえ、存在するものは刹那滅であると理解すべきである。

〈kās.88-87 終了〉



(未完)

\* 本稿は、同題名「刹那滅と輪廻轉生」(長崎大学教育学部「社会科学論叢」No.50,1995, 6; 以下「前稿1」と略)の続編である。

## 註 記

- (1) 以下、第86～88偈の注釈である。上述第84, 85偈で説かれた十四種の生起が刹那滅であることの、九種の理由・原因を展開する。既に拙稿6で触れた如く、この九種因は刹那滅論証として何等目新しいものではなく、先行する *kṣaṇikatva* (*kās.82,83*) で既に展開された刹那滅の根拠を適応・援用したものであること、そのことがまたここ第84～88偈の「内なるものの刹那滅」の特色であることも既述の如くである。この九種因と *kṣaṇikatva* (*kās.82,83*) における刹那滅因との関係は、以下必要に応じて註記にて明記する。
- (2) 【釈疏】「*rnam pa bzhi*」を【本論】「*caturdaśavidhām ,rnam pa bcu bzhi*」により訂正して読む。
- (3) 十四種生起の刹那滅を立証する九種の理由・原因を、【釈疏】は「原因(*gtan tshigs*)と認識(*tshad ma*)とにより」という。しかしこれら九種の理由・原因のいずれが原因もしくは認識に対応するかは、必ずしも明白ではない。なお「認識」に直接対応するであろう、九種因第二「*māna*」については後出註記(6)参照。
- (4) カララ等の出産前胎内児の区分については「前稿1」註記(10)参照。
- (5) 【本論】「*nopalabhyate*」に対し、Tib.はP.,D.ともに「*dmigs par 'gyur ro //*」であり、否定辞が欠落している。他方【釈疏】の引用「*mi dmigs par 'gyur te //*」(*P.174b8*)、【広註】の引用「*dmigs par mi 'gyur ro //*」(*P.171b8*)は、ともにSkt.に対応する。
- (6) 九種因の第二は *māna* である。上註記(3)でも触れた如く、MSA-Bhは「*mānaṃ pramāṇam ity arthaḥ /, tshad ni bong zhes bya ba'i tha shig ste /*」と言い、また *mānaviśeṣa* (*tshad kyi khyad pa*)を *parimānaviśeṣa* (*tshad khyad pa*)と言い換えている。したがって *māna*, *pramāṇa*, *parimāṇa* は同義であると理解されよう。さらに【釈疏】が「*māna*; *tshad* と云う意味は、順次に変化し増加する[もの]の *bong* (大きさ, *pramāṇa*)をいう。」とあり、あるいはカララ、アルプダなどの大小のサイズなどと説かれている。【広註】もまた「認識の区別とは、カララなどの状態の区別である」と云う。このように【本論】や両復註によれば、この「*pramāṇa*」は、いわゆる仏教論理学における「認識手段」(*pratyakṣa* と *anumāna* を内容とする)の意ではなく、「認識により区別される大きさ、サイズ、量」と解されよう。「*pramāṇa*」のチベット訳「*bong*」(*in size, sized*; Ch.Das, *Tib.-Eng. Dic.*)もこの理解を支持するようである。本稿ではこの意味でとりあえず「[認識された]サイズ」の訳を当てる。したがって、拙稿6中の「認識[手段]」(*p.368*)は「認識されたサイズ、大きさ」に訂正する。
- (7) 「*upastambho hi cayaḥ /*」について。拙稿6では *caya* 及び *upacaya* を成長する五蘊の集合体と理解し、「集積」と訳した。したがって *upastambha* は「身体という支え、基盤」とした。本稿ではこれらはその五蘊の成長に重点があると解し、それぞれ「成育」、「養成」に改めた。これにともない、拙稿6 (*p.368*)中の「集積」は「成育」に訂正する。なお、*caya* 及び *upacaya* に対する【本論】の蔵訳は *rgyas (pa)*; *to increase, spread, grow, develop* であるが、【釈疏】では【本論】の引用・釈文とも *sogs pa*; *together, heap up, collect* である。
- (8) 【本論】「*caṃpārthyāt /, skye ba la don med pa'i phyir te //*」に従い、【釈疏】の引用後半「*sogs pa don med par mi 'gyur ba'i phyir te //*」の下線否定辞を削除する。
- (9) 「*nyam tsho (or tshe) zhing*」意味不明。
- (10) 「*nam*」意味不明。
- (11) *āśraya*, *āśrita* に関しては前稿1註記(17)を見られたい。
- (12) <4> *āśritatva-asambhavāt* について。前稿1註記(11)の如く、ここでは *āśraya*, *āśrita* の関係から刹

那滅論が展開される。すなわち āsrita=vijñāna が刹那滅であることを前提に(拙稿 1, p.7~11, 拙稿 5c (10) taddhetutvatas, 拙稿 6 註記(12)など参照), āsraya=indriya が常住ならば, 刹那滅である āsrita=vijñāna は不可能であることに基づき, āsraya=indriya の常住性を否定するものである。その比喩として yāna (乗物; 例 rta=aśva,haya, 馬)=āsrayaと yāna-ārūḍha (乗る人)=āsrita が説かれる。その対応を確認する。

|        |      |         |      |             |
|--------|------|---------|------|-------------|
| āsraya | ———— | indriya | ———— | yāna        |
| āsrita | ———— | vijñāna | ———— | yāna-ārūḍha |

【本論】の「yāne tiṣṭhati tadārūḍhānavasthānavat, 乗物が停まっていて, それに乗る人が停まっていない(移動する)如し」に対し, 【釈疏】は「馬が留まっていて, 乗る人が移動するのは不合理である。乗る人が移動するならば, 馬も移動する。そのように, 根(=āsraya)が常住ならば識(=āsrita)も常住であり, 識が刹那滅ならば根も刹那滅である。」=A → B; -B → -A」と云う。これは新たな刹那滅論ではなく, すでに触れたように, kās.82,83 (10) taddhetutvatan (拙稿 5c 参照), すなわち有爲なるもの(indriya など)と心(vijñāna)との因果関係による刹那滅論証を āsraya, āsrita の視点から改めて説明したものである。

(13) 【広註】のこの一文「mi gnas bzhin du mig gi rnam par shes pa 'gro bar ni rigs pa ma yin te」は, 筆者には難解, 仮の訳出である。

(14) 以下【本論】・【釈疏】とも明言するように, 十四種生起の(5) vikāra~(10) abhāsvara に応する九種因の<5>-1) sthita-asambhava~(6) abhāsvara は「ādyanāśāvikārataḥ /, 最初から消滅しないものには変異が無いから」が共通の証因である。この証因は kās.82・83 における「変異説」に, 直接には(8) nirodhatas に対応する。

(15) 「ante vikārābhāvāt /」に対し蔵訳, 及び【釈疏】引用文(15a)は「tha mar yang 'gyur ba med pa'i phyir ro //」である。今は(15a)ともども前者に従う。

(16) 【本論】「tathā.....yathā vikāraparipākotpattau /」(蔵訳も同意)に対し, 【釈疏】は(16a)の如く「yathā」以下を次の文「na hi tathāsthiteṣu ...」と共に引用し, そのように注釈する(「たとえば, 幼児から青年などへと成熟する場合に, ……」)。【本論】の「tathā.....yathā.....」構文からすれば, 【釈疏】の引用には疑問が残る。【釈疏】が引用した梵文テキストは現在の Lévi 本と異なっていたのであろうか。

あるいは, 【本論】に従い, 【釈疏】を「[上記の変異により生起する場合や] 成熟により生起する場合と同様である。何となれば, 諸々の有爲なるものがまったく同じ状態で存続している場合は, ……」と理解することも可能であるが, それでは【釈疏】の注釈と一致しない。ここでは【釈疏】の釈文を考慮し, 上述(16a)の如くに訳出した。

(17) 業の習気(karma-vāsanā, las kyi bak chags)について。習気(薰習)を考えると, この要語は, 「業(果)異熟(karma-(phala)-vipāka)」(cf.MS などの)用法とともに重要であるが, MSA-Index (by G.M.Nagao)によれば, この個所のみである。周知のように『中辺分別論』I-10 comm.に「ropaṇ-āt saṃskārair vijñāne karmma-vāsanāyāḥ pratiṣṭhānāt /」とあるが, その Sthiramati の復註にもとりわけ詳しい釈文があるわけではない。

あるいは MSA-Bh 「karmavāsanā vṛttim labhate. ... /」のこの一文は, 『三十頌』kā.1d に対する Sthiramati の釈「phalapariṇāmaḥ punar vipākavāsanāvṛttilābhād ālayavijñānasya pūrvakarmākṣepaparisamāptau yā nikāyasabhāgāntareṣv abhinirvṛttiḥ. .... /」に先行するものとして留意すべきである。いずれにせよ, この語や次の「相続轉變差別(saṃtati-pariṇāma-viśeṣa)」が, ここ MSA において刹那滅論の中で展開されることの意味については稿を改める必要があるだろう。なお『成業論』§ 13 (山口益本 p.162~; 室寺義仁本 p.23~)を参照されたい。

(18) 「前稿 1」(9) bhāsvratva とその注釈によれば, 欲界下四天から欲界上二天・色界・無色界に生まれ変わる場合である。

(19) 前出(9) bhāsvratva の「bhāsvratvena yo nirmītakāmeṣu paranirmītakāmeṣu rūpārūpyeṣu copapannānām cittamātrādhīnatvāt」に対応(「前稿 1」p.23参照)。

- (20) 「前稿 1」(10) *abhāsvaratva* とその注釈によれば、欲界上二天・色界・無色界から欲界下四天に生まれ変わる場合である。
- (21) 【釈疏】「*sngon 'od gsal ba las phyis 'od mi gsal bar*」を、直前の一文と比較して「*sngon 'od mi gsal ba las phyis 'od gsal bar*」に訂正して訳出した。
- (22) 【本論】「*bhāsvare tāvat tathāsthitasyāsaṃbhavāt cittādhīnavṛttitāyāḥ / re zhig 'od gsal ba la ni de bzhin du gnas pa la sems la rag lus te 'jug pa ma srid pa'i phyir ro //*」であるが、【釈疏】の引用は「*'od gsal ba ni de ltar gnas pa las mi 'byung ba'i phyir te / 'byung ba ni sems la rag lus pa'i phyir ro*」であり、不明瞭である。いまは【本論】から引用する。